

toVO トヴェ  
PLUS

www.tovo2011.com

SEASON 4

No.043 - 100号まで、残り57家族、57ヶ月



NO. 043

あおぞらの100家族、おたたちのこれから

20151011





今号（44家族目）のご家族▶

藤林 秀さん・真実さん・輝くん・慧くん

撮影場所▶つがる市

【インタビュー】

●2011年3月11日のこと、憶えていますか？

▶秀さん「鮮明に覚えています。当時は保育園の保育士をしてて、仕事でした。子どもたちが昼寝から起きるか起きないかくらいの時間に地震が起きました。すぐにただの地震じゃないことが分かったので、職員が全員でドアや窓を開け、子どもたちの上に布団をガバっとかけて、地震の経過をみていました。テレビでは、八戸市のコンビニの津波の被害が流れていました。子どもたちは120人くらいいましたが、特に泣きわめくような子どももなく、ポカーンとした感じでした。その後は、親御さんが、それぞれ迎えにきましたが、最後の子どもが帰宅したのは、午後7時くらいだったと思います。いつも妻に車で仕事場まで送ってもらってたんです。でも、その日は妻とは全く連絡がとれなくて、帰りは30分くらいかけて歩いて家に帰りました。」

▶真実さん「その頃、私は仕事をしていなくて、地震があった時には家にいました。普通の地震ではないと感じたので、心配になって、すぐに子どもたちを保育園へ迎えにいきました。子どもたちはみんな帰る準備をして、一箇所に集まっていて、みんな不安そうにしてましたね。夫には、いつもの迎えに行く時間に連絡してみたんですが、全く通じなかったんです。とりあえず車で迎えに行ってみたんですが、ちょうどすれ違いで、家に戻ったら帰ってきていました。ホッとしました（笑）ガスは使えたので、夕食は適当に作りましたが、灯りがなくて困りましたね。携帯のライトなんかを使ってました。実家からロウソクをもらってきたと思います。暖房もなかったので、その日は、布団をかぶって早めに寝ました。」

●子どもたちは覚えてますか？

▶秀さん「さっき子どもたちに聞いてみたんです。下の子は記憶がないんですが、上の子は、地震の次の日に集会所に行ったことを覚えてました。近所の集会所には発電機があって、電気が使えたり、暖房も使えたので、そこに避難している方も多かったんです。集会所で他の家族の子どもたちとおもちゃで遊んだことをよく覚えていましたね。」

●地震のあとで心境や生活の変化はありますか？

▶秀さん「ロウソクと灯油ストーブは準備しています。」

▶真実さん「2人で、何かあった時に、家族がどこで合流するかっていう話をして決めましたね。」

」

▶秀さん「同じ日本、同じ東北、青森でも大きな被害があったにも関わらず、ライフラインが復旧するにつれて、正直、どこか遠くでの出来事のような感覚になってきました。そんな中、母親が被災地支援に行くということになって、私も何度か陸前高田や大槌町へついていったんです。実際に被災地の被災状況を歩き、避難所で被災者の方々と話をしたりしました。そこで子ども向けのワークショップをしたんですよ。その時の子どもたちの会話がとても印象的で、この子たちはどんな大人になるんだろうと考えます。実際に被災地に行って、そこでの経験を通じて、東日本大震災が現実味を帯び、自分のこととして捉えるようになりまして。学生時代は仙台で過ごしましたので、仙台は第二の故郷なんですけど、陸前高田市や大槌町は第三の故郷になりました。」

▶真実さん「私は震災を経験して、何が起こるか分からないんだなあと感じて、今を大事に生きなきゃいけないんだと感じました。家計的にとても厳しくて、それまでは、どこに出かけるにしても節約節約で、ケチケチしながら遊びに行っていたんです。でも、震災後は、どこかに出かけても、もしかしたら、この時間はもう二度と来ないかもしれないと考えるようになって、子どもたちには、いろんな体験をさせたいとか、美味しいものを食べさせてあげようとか、その時にはお金はバット使ってもイイやと考えるようになりまして。楽しむ時には楽しもうと。あと、震災の時、ちょっとの時間ではあるんですが、夫と離れていたのが、私にはとても不安で、怖くて。夫が家に帰ってきた時には、本当に安心したんです。家族が揃っているのはイイなと思いました。いるだけで違うんだなと。」

### ●10年後のイメージは？

▶秀さん「この震災を次の世代に伝えていく責務を感じています。今も地域の子育て支援活動をしていますが、この震災を通じて得た経験を生かした、次のステップの子育て支援活動というのを考え、実行していきたいと思います。」

▶真実さん「子どもたちはノビノビ育ってて、家族4人が元気でいたらイイですね。」

▶輝くん「うーん。仮面ライダーゴースト。」

▶慧くん「サッカーやっていたい。」

【取材後記】今号は、子育て支援を通じた地域づくりを続けている五所川原市の男性保育士グループ「PAPAHUG(パパはぐ)」の藤林さんご家族。岩木山をバックに、秋の夕焼けに染められて、どこまでも続く実る稲穂の中での撮影。ご家族のお話を聞きながら、時の流れは僕たちの記憶を遠く運んでいってしまうけれども、その時、うまく整理できなかった想いだけはずっと残っていて、それが一体何なのか？今だから言葉に表せることってあるんだなと考えていました。(今号No.043の撮影とインタビュー担当者：小山田和正)

【寄付総額】2011年6月～2015年8月30日まで「¥3,532,702」を、あしなが育英会「あしなが東日本大震災遺児支援募金」へ寄付することができました。ご支援に深く感謝致します。

【定期購読のご協力を!】1年間の定期購読を承ります。1,800円(送料・寄付含)／1年間(12号)です。このフリーペーパーは定期購読の皆様のご支援で発行されております。ご支援の程、宜しくお

願ひ致します。ご希望の方は、ウェブショップ (<http://shop.tovo2011.com>) よりお申し込みください。